

雨上がりの川

森沢 明夫 作

オカヤイツミ 画

(162)

第六章 それぞれのモノローグ(18)

【紫音の話】

「これからの長い人生、命賭けでこの力と一緒に生きていこうっていう覚悟はある？ 悪霊とか、他人の悪意とか、悪い気とかと闘っていける？ もしも春香ちゃんに、本当にその覚悟があるなら——、それなら、開花させてあげてもいいよ」

春香の顔を見た。

唇を半開きにして、難しい顔のまま固まっている。

まあ、ここまで脅せば、ふつうはやめておくと云うもの。これまでだって何人ものクライアントに霊能力の開花を求められたけれど、この話をしたら全員が怖気付いて諦めてくれたのだから。

「あの、わたし……」

「なに？」

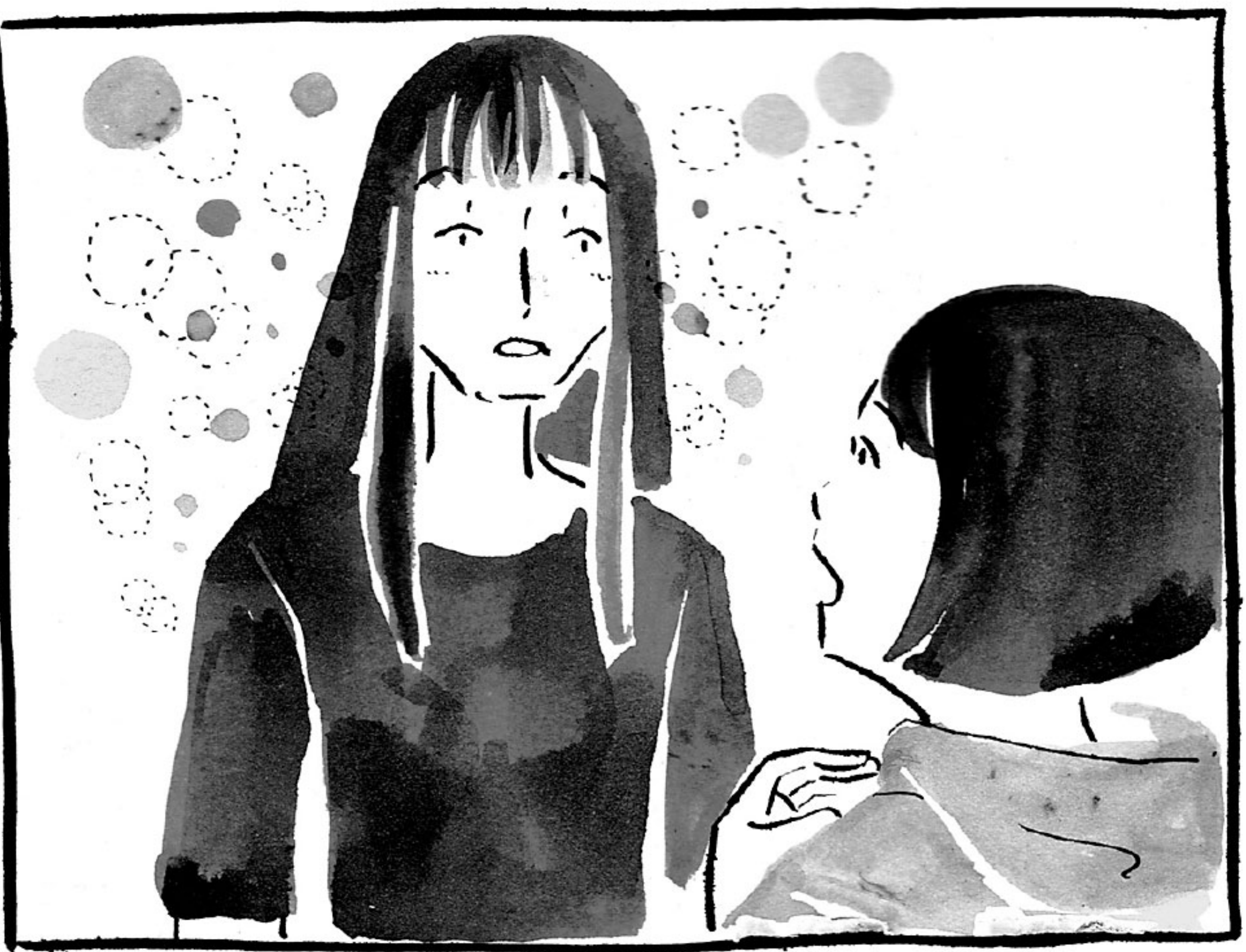
「紫音さんみたいに——、なりたいんです」

うつむき加減の春香が、ちよつと不安げな目をこちらに向けてつぶやいた。

「え……」

わたしは、思わず息を止めていた。

このわたしみたいに、なりたい？



目の前の春香をぼうつと見る。

思春期の少女が浮かべた切実な表情——。

わたしという存在を求めて、じつと見つめ返してくる、濡れた黒い瞳の純粋な光。

胸のあたりがぞくぞくして、身震いしそうだった。

まるで心臓のまわりを生ぬるい少女の指が這い回り、えも言われぬ甘美なタッチで愛撫されたような気分だ。

わたしは背筋にザザツと鳥肌を立てた。

「紫音さんが、わたしにしてくれたみたいに……って言うか……、いじめとかで心が弱っている人を、やさしく助けられる人になれたらいいなって思っ」

「春香ちゃん……」

もう一回——、もう一回、言ってみて。

「でも、やっぱり、駄目かあ」

「え？」

「わたしの才能くらいじゃ、紫音さんみたいにはなれませんがね」

愛くるしいたれ目に、落胆の光をたたえた少女が、わたしを見つめていた。

「春香ちゃん、わたしみたいになりたいの？」

あきらめ気味に微笑みながら、小さく頷く少女。

「そっか。うん、そっか」